

観光

——「こわいもの見たさ」の旅から、
モンゴルならではの旅への脱皮を

10年ほど前から現地手配をさせてもらっているある企業のツアーは「若手リーダーの育成と国際交流・協力」がおもな目的である。日本・モンゴルの担当者間で毎年ちよつとした議論がおこる。モンゴル側はできるだけおいしい料理と快適なバスを手配しようとする一方、日本側は「それではモンゴルらしくない」と一刀両断にしてしまうからだ。まずいものを食べ（食べられず）、条件の悪いバスで移動して体調をこわしてしまつては、モンゴルで見るべきものを見るのができなくなってしまう。この議論の根っこには「モンゴルは遅れている」という先入観がある。これでは、国際交流や相互理解

内田敦之 コラム12

に余計な手間や時間がかかってしまうように思われる。モンゴルの経済成長率は11・74%（2013年）で、世界トップクラスである。地下資源に頼りきった経済開発が決して良いわけではないが、モンゴルの経済や社会の変化は著しく、モンゴルがすでにかつてのモンゴルでないことは訪問する度に実感できる。

2012年に行なわれたモンゴル観光業界主催のセミナーのプレゼンテーションでは「わが国のインフラやサービスはこんなに未整備で大変ですよ」という内容が中心であった。モンゴルの旅には確かに多くのマイナス要因はあるが、それをカバーして余りあるプラス面こそがモンゴルの魅力なのである。それをわかりやすく説明し、参加者にまずは関心を持ってもらうべきで、セミナーは非常に残念な内容になってしまった。モンゴル・ツーリズム発展のためには、



歴史に裏打ちされ、非常に合理的な遊牧文化。(2011年5月)

これまで日・モ双方がとらわれていた「モンゴルの旅は悪条件」「こわいもの見たさ」という先入観から一刻も早く抜け出す必要がある。それでは、観光客に何をどのように見せれば

るのは至難の業である。これらをうまく伝えることができれば、非常に見えにくい遊牧文化の魅力が少しでも具体的な形になって、観光における「遊牧」というキーワードが活きてくると思われる。そのためには、ガイドを中心とする

いいのであるうか。十分に整備されているとは言えないものの、モンゴルにも数百年前のストーンサークルや石人・鹿石などの遺跡、仏教寺院や博物館などの観光施設はある。また、世界のホテルチェーンや一泊4万円の高級ゲルキャンプなどの宿泊施設もでき始めた。一般的な海外旅行で要求される観光資源はあるにはあるが、まだ整備段階である。その一方で、世界でも希有な遊牧文化にふれることがモンゴル・ツアーの大きな魅力の一つであることは確かであるう。ただし、遊牧はその簡素さのために表面的な説明だけではわかりにくい面があり、せっかくの遊牧体験でも見過ごされてしまう。フェルト製住居ゲルや乳製品・肉料理など食文化等の物質文化さえも、その合理性や機能性を解説しなければ理解しにくい面が多い。ましてや、家畜の放牧・伝統的しきたり・世界観など精神文化の魅力を短期間の滞在で観光客に伝え

人材の養成が何よりも重要である。それと併行して「ソチロホ・ヨス（モンゴルのもてなしの心）」を観光サービスに応用するしくみをうまく創ることができれば、モンゴルの旅はさらに魅力を増すであろう。